

現地を訪問して思うこと

吉見弓子

はじめに、今回のツアーに参加させていただきましたことを関係の皆様方に心から感謝申し上げます。校友会報に同封されていたチラシを手にした時、震災直後から繰り返し報道された映像の記憶と、当時、離れた地にいながらも感じた言葉にできない不安な気持ちを思い出し、胸が締め付けられる様な思いがよみがえりました。

いつか訪れたい、何か出来ることがないだろうか思っていたこと、また、震災から2年が経過した現在の状況を自分で確かめたいという思いから申し込ませていただきました。

今回は一人での参加でしたので、どんな様子になるのだろうという気持ちもありましたが、結果から申し上げますと、気づきと学びのある素晴らしい2日間でした。

南三陸町の訪問では、津波の大きな被害を受けた沿岸地区被災地を見学し、今年度中に取り壊しの予定である「防災対策庁舎」での黙祷を果たすことも出来ました。また、ボランティアガイドお話では、まさかこれほど大きな津波が来るとは誰も考えていなかったという表現が何度もあり、思い込みの怖さを痛切に感じました。マニュアルどおりの避難の結果、全滅した事業所がいくつもあるとの凄まじい事実や現在でも更地のままの場所が多く見受けられる状況にまだまだ大きな傷跡があることを感じるとともに、被災された方々の「日常を取り戻したいと思っている」「起こったことを一人でも多くの人に伝えてほしい」という魂からの言葉に心が揺さぶられました。

また、壊滅的な被害を受けた名取市閼上地区に工場を持たれていた校友の佐々木御夫妻の震災直後から工場再開に至るお話を伺い、様々な困難に立ち向かいながら復興を目指して立ち上がり、頑張っておられる姿に、同世代の人間として感じるどころも多くあり、これからも応援をさせていただきたいと心から思いました。

震災直後からの報道やマスメディアの問題、行政や助成金の課題等の話にも、それぞれに事情がある中で、これからの社会がどのように進んでいくことが必要なかということをも改めて考える貴重な機会となりました。

ツアーでのもう一つの収穫は、全国から集まられた校友、宮城県の校友の皆様との交流です。懇親会や2日目の仙台城の観光では、世代や地域を超えての交流で心の温まる時間をいただきました。

今回の訪問は、正確な情報を得ること、自分で考えることの必要性と人と人とのつながりが大切であることを改めて思う時間となりました。